(佐々木注)　２００５年４月１９日作成
原題「新庄記録（１)」原文はＡ４判　６ページ(ページ番号なし)。
以下、原文をそのままに、欄外にページを付与したもの。

１７．１
新　庄　直　常

新庄記録

回　想（１）

（呉海兵団当時のことども）

１．兵学校卒業から呉海兵団着任まで

昭和１４年正月以来風邪を引いたり時々胸痛があったりしていたが、各種競技などの行事の外艦隊実習、遠漕、航空実習、原村演習、航海実習等をすませたところで、５月に入って胸痛が激しくなり発熱して５月１５日受診すると、即刻「右胸膜炎」と診断され即日入室、高熱でしばらく安静のやむなきに至った。

早速分隊監事、部監事まで見舞いに来られ、級友や下級生も相次いで見舞ってくれた。これから最終考査が始まろうというときで、卒業が出来るかどうかが大問題であった。５分隊本多伍長、辻君は足繁く来て雑用も片付けてくれ、他に吉武君、檜垣君を始め、同分隊、元の同分隊、その他の級友が屡々来てくれた。（個人名編者省略）

始め大部屋であったが３日後個室の二人部屋に移った。軍医長の長谷川静一軍医大佐は神戸二中第１回卒業の大先輩で、（私は２４回）格別意にかけて頂いた。軍医長は私が考査を受けることには否定的なお考えで、私自身もとても受けられる状態ではなく卒業も無理だろうと思いかけていた。考査には一号で初めての科目も多く、特に主要科目の「航空」や「航空力学」はまだ一度も考査がなく、他にも「造船」や法制経済、医療衛生等もあり、一度の講義も受けていない科目が幾つかあった。それらのすべての考査を受けなかったのである。

６月になって、同病で宮島君、森園君が入室したが、二人とも苦痛に耐えて受験していた。私は半ば羨ましい思いで横目で見ていた。卒業を半ば諦めて心穏やかならぬ日々を送るなか、三木教官、俵指導官、高橋分隊監事が相次いで来て下さり、卒業について本人の希望はどうかと尋ねられた。それについては、ハンモックナンバーが一生ついて回るから今の一二年で将来を誤るな、との御忠告を含み、殊に苦い経験をされた具体的な苦衷談も伺った。私は自分の意思を尊重して下さるのであれば、今更６８期編入は忍び難いので、是非６７期のまま卒業させて頂きたいと申し出ておいた。私には一年遅れても十分に回復して今より良い成績で卒業できるとも思えなかった。

その頃檜垣君などは、わざわざ私のために力学のノートを作って是非受験しろと勧めてくれ、少々動揺したが、遂に入室後は一科目も受験しなかった。　　日記によると各教官の御忠告、１．俵中佐「病気をするなら生徒のうちだ、将来もう入院しない自信があるか」２．三木大尉「大分あせっている様だな」と思いがけないお言葉、そのほか、３．碇少佐「のんびりやれよ」４．住山大尉「卒業してからは生徒のように呑気な療養は出来ない、将来のため一年遅れてはどうか」５．大井分隊長北原中尉「俺も病気をした、病気中は早く治りたいと思うが、治って

みれば短いものだ、あせらず療養しろ」そのほか市川中佐、猪口少佐もお見舞い下さり、「無理をするなよ」と。当時私は「あせっている」つもりはなかったので「あせるな」との御忠告がピンとこなかった。

６月１３日生徒隊監事が直接お出でになり卒業の希望を聞かれた。そして翌１４日俵指導官と高橋分隊監事が来られ、「卒業できることに決まった」と正式に知らせて下さった。

６月中旬まだ午後３８度の熱が出ていたが、羽田中佐に「熱がある方が歩き回らなくて失敗がない」といわれ、そういうものかと思った。この入室中下級生も５分隊二号三号四号入れ替わりによく来てくれ、他に旧２２分隊員も何人か尋ねてくれた。

６月下旬森園君と同室だったところ、彼の咳が止まらず、私も夜の睡眠がとれなくなりまた大部屋に移った。その翌日大村隆吉君が水泳訓練中呼び出され、肺炎の疑いとかで急遽入室を命じられて隣のベッドに来た。数日して検査の結果結核菌陽性で、彼一人別の隔離病舎に入れられてしまった。

７月に入ってやっと熱も下がったが、肺活量は当初の３８５０から１６００に減っていた。（日記は７月２日で終わり、あと記録無し）（編者中略）

いよいよ卒業式、前日の予行から大講堂で全員成績順に並んだ。思いがけず私はビリでなく七十何番目であった。どうやって成績をつけて下さったのか不思議に思った。卒業式後の送別茶話会も両親共に出席した。

練習艦隊乗艦の諸兄を見送ることはなく、我々呉団組は家族と共に指定宿舎のクラブに一泊、翌２６日午前、旧生徒館前で高等官退庁の礼式により生徒の見送りを受け、正門から呉海兵団に向かった。呉団附になったのは、入室中の４名（大村、宮島、森園、小生）の外、進藤、原田両君を加え６名であった。大村君は暑いのにマスクをしていた。呉団着任の挨拶をしたところ、副長が大田実中佐（のち沖縄特根司令官）で、「俺も中尉のとき三年休んだ、治ればこの通り元気だ、ゆっくり療養しろ」と４名の転地許可手続きをして下さり、進藤、原田両君はそのまま呉団勤務となった。４名はそれぞれ自宅転地となり、後に宮島君は横団、森園君は佐団に転勤となった。大村君と私は、行李や布団袋を海兵団に預けてそれぞれ自宅へ向かった。

こうして多くの教官、級友等に励まされ、転地療養になったのであるが、私は６７期のまま卒業させて貰ったことで精神的に随分安定し幸せだったと思っている。

（追記）前述の教官のうち、軍医長については既に述べたが、住山校長は父の中学時代からの知人、住山勝美教官は関東大震災当時横浜で隣家におられた。また航空の馬野教官は、兄が戦死する前上海でお世話になっていたようで、それぞれに気にかけて頂いたと思う。

２．転地療養

結核について私が正しい知識を得たのは戦後のことである。当時は結核菌陽性のものを「肺結核」、同じ症状でも陰性の間は「肺浸潤」といい、私自身も「胸膜炎」とは肺そのものではなく、胸膜だけが冒されたと思っていた。いずれも結核性だから同様の療養をするように言われ、「大気、安静、栄養」の三原則を示された。特効薬のなかった当時、他には若干の効能が期待されるカルシュウム剤の注射か、ビタミン剤その他の栄養剤や消化剤の投与しかなかった。胸膜に溜まった胸液を抜いて貰って少し楽になったものであるが、また直ぐ溜まるので、抜いたのは結局二回だけ、あとは自然に吸収され、長時間のうちに肺活量も徐徐に回復した。

結核菌は体内に運ばれて、或いは腸を冒され、腎をやられ、骨を冒されればカリエスとなり、ひどいときは全身の至る所に廻る例を見聞したが、私の場合は、翌１５年夏と１７年夏の二回他の部位を冒されたわけである。もともとは肺を冒されていて発病したもので、２０年春には遂に血痰ついで喀血して「肺結核」となった。私は軽微なうちに出血したので、その後重症にならずにすんだが、終戦後の闘病は苦難であった。２０年秋久里浜病院に入れて貰ったものの、復員兵に追い出されて目黒の第二国立病院（旧海軍病院）に移され、２１年春にはまたここも追い出された。丁度住居にもトラブルがあって、致し方なく母の故郷愛知県瀬戸市の山小屋に引っ込むことになった次第である。結局昭和２６年まで断続的に治療を受け、あと幸い再発しなかった。（現在も年一回のＸ線検査では石灰沈着した径１センチほどの陳旧性陰影がある）

さて昭和１４年転地したのは、その年移転した西宮の家で、兄の遺影とその春に頂いた金鵄勲章や旭日章を飾ってある部屋で、孝の終わりを全うした兄に比べ、孝の始めで躓いている自分を責めながら、一日も早く治りたいと願いつつ、静かに寝ていた。

前期三原則でぼつぼつ回復期に入り、リハビリといっても散歩する位だが、これも少し歩き過ぎて熱を出すような失敗を繰り返し、暗中模索であった。一方転地の許可は２１日間となっていたので、三週間毎に医師の診断書を添えて申請するのが仕事であった。私の履歴書はその記事（朱書）の連続で真っ赤になっている。その間毎月俸給全額を送って頂いていたのだから，勿体ないことであった。

毎日郵便を見に行くのが楽しみであった。遠航便りが待ち遠しく、手紙や絵ハガキを沢山貰った。特に吉武君は航海中の様子なども逐一書いてくれ、後にはネービー語も教えてくれて出勤後早速役に立った。呉団からは進藤君が達筆な墨書で巻紙をくれたのには驚き、刺激されて習字をしてみたが、勿論モノにならなかった。

秋に入ってから散歩も次第に距離を伸ばし、明治節には始めて第一種軍装を着て湊川神社に参拝に行った。その頃外航船の船長をしておられた伊藤正人君の父君が、わざわざ見舞いに来て下さり、恐縮した。

年末には生徒の休暇で、５分隊員数名が立ち寄ってくれたのも大変嬉しいことであった。

そして何より嬉しかったのは、紀元二千六百年、艦隊が大阪湾に入港して、クラスの諸兄の来訪を受けたことであった。吉武君からの事前の知らせを受け、そわそわと海岸まで散歩に出たりして待っていた。中村（悌）も訪ねてくれ、「高雄」に招いて貰ったと思う。深江の高等商船桟橋から「高雄」に行き、当直将校の古賀祐光さんが昼からよいご機嫌だったのを思い出す。他の来訪者でよく覚えているのは、櫻井（伊勢）、本多（金剛）、辻、安達（加古）、阿部（赤城）、吉武（那珂）の諸君である。

艦隊艨艟を目のあたりにし、元気な級友に接して、切実に早く出勤したいと思った。３月一杯休めば十分と思い、副長に４月始め出勤を申し出たが、副長から「丁度特命検閲があるから、もう三週間延ばせ」とお返事を頂き、がっかりしたが、やむを得ず４月２２日出勤した次第である。

後日転地中に充分時間があったのに、まとまった読書もせず、教務の復習もせず、惜しいことだったと悔やんだ。折角覚えたことが、この間甚だしく蒸発してしまったことに、度々気付くこともあった。ともあれ出勤できたことは幸せであった。大村君は遂に呉団に出ることなく、翌１６年５月に亡くなったと後で知った。

３．呉海兵団勤務

海兵団は、教育、補充、軍港警備を任務とし、昭和１６年にはそれぞれ分割してしまったが、当時は全部一緒で、分隊数も何十と多く、補充分隊ではときに一個分隊千名にも及ぶことがあった。にもかかわらず兵学校出の先輩はごく少数の幹部だけで、特准天国であった。特務上がりの少佐もおられ、兵員からは将官並に尊敬されていた。ガンルームはなく少数の我々や軍中等は士官室の末席に座って食事をしていた。

病気上がりの先輩も無任所で数名おられた。海軍では「待命」が一年間、「休職」が二年間で、見込みがないと予備役編入になる。その直前に出勤される方もあった。当時進藤君は既に「比叡」に転出し、原田君が残って分隊士をしていたので、何かと教えて貰い、呉市内も案内してくれた。水交社では、６６期の徳納さんや山田菊夫さんにも会っていた。

出勤間もない頃、特命検閲使？の出迎えで、鎮守府前に手空きの士官が整列したことがあった。ギゴチない候補生が十数名おり、工廠から来たようなので私はその先頭に並んだ。数日後またその見送りで整列することになり、行ってみるとその候補生達（造船、造機、造兵）が一人もいない。よく見ると皆新少尉になっているのであった。苦い思い出の最初である

海兵団では兵舎の二階角の一室を私室に充てられ、６３期の古田中尉と同室であったが、御自宅が呉市内なので、夜は殆ど一人であった。昼間は時々６３期の新庄太郎中尉（元６２期で兄と同期であった）や新兵分隊長の６３期今井保一中尉が来られた。私の配置は「保健班主任附」。病み上がりの兵員を各分隊から集めて軍医の指導のもとにリハビリを行うのが保健班で、回復度により軍医が三ランクにわけ、それぞれに適した軽作業をさせるのであるが、全員が楽しみにしていたのは月一回の保健行軍であった。私は何時も一番遠いクラスに付いて行き、二河公園や狩賀濱等、一度は江田島小用の北方海岸にも行った。行軍には無任所の先輩士官達の中にも同行される方があった。この方々は普段よく下士官相手に今でいうゲートボールのようなこと（当時コロッケと呼んでいた）をしておられた。

臨時の仕事としては、時々見学者の案内を頼まれたり、また各島嶼などにある防空砲台回りの定期便や臨時便のチャージに出された。チャージとは名ばかりで、大きなタグボートのような船の場合もあり、艇長任せで、反対に教えて貰っていた。遠いところは屋代島まで一日がかりであった。

夏服の頃６６期の松下浩少尉が来られ、よく長官艇のチャージに出られた。私も教えてもらい二軸の方が楽だなと思っていたところ、ある日何度目かのチャージに出て、参謀長を前後係留の「長鯨」に送ったとき、横からの潮流が異常に強く達着に二度失敗、副官に怒鳴られてやっと爪竿頼りに着けたことは忘れられない。長官艇では、一度京都の久邇宮妃殿下を小用までお送りしたこともあった。

１５年７月艦隊の艦船が母港に入港してきた。海兵団からは桟橋係を出すので、私も数回出た。元気なクラスの何人かに会えた。その頃海兵団では毎日二種軍装なので洗濯痛みで困っていた折、鈴木広次君（二号２２分隊で一緒）が次の便で届けてくれ助かった。

保健班主任は何人か替わられたが、６５期橋爪弘中尉（四号２分隊の二号）のとき、ある朝保健班先任下士官に起こされ「００兵曹が縊死した」と報じた。昨夜来行方不明のところ、早朝倉庫内で発見したというので、駆けつけたが、無惨なことになっていた。保健班にはそういう病人もいたのかと、残念でショックであった。

７月始め原田君が「日向」に転出、(進藤君も同時に「日向」に転勤）私は原田君のあとの第二分隊士を命じられた。勿論ダブルで本命は特務少尉、兵科役員分隊で、数十名皆経歴豊かな兵員で、分隊事務は複雑な例が多く、翌春転勤までしっかり勉強させてもらった。

８月７日６８期が卒業、もと６７期の内海通吉、上原裕両君が着任した。

翌８月８日は一号艦の進水、その日午前１０時「満潮時を期して陸上警備演習を行う」という異様な命令で、呉市内の港の見えるところは悉く封鎖したとのこと、我々にも外に出るなとのことだったが、旧防備隊兵舎二階のガラス窓越しに巨体を遠望した。

その夏、新任準士官講習（略称准講）の国文法の教務を仰せつかり、教科書もなく町の本屋で受験参考書を見付け、例文に「連合艦隊解散訓示」を選んでプランを組んだ。中学時代の自信で始めたところ、最初の品詞区分が意外に難しくシドロモドロで、恥ずかしい思いをした。

夏の終わり、大演習には呉通信隊も参加していたらしく、同室の古田中尉は呉通に転出された。その直後私も呼んでもらい、呉団から出張の形で２０日ばかり泊まり込みで見学、大テーブルに広げた地図上で電文による戦況を覗いた。遠航に行けなかった私は、南洋の島島の名も覚えながら思いを馳せたことである。海津君が殉職されたことはあとになって知った。（婦人雑誌でも取り上げられた）

１１月頃陸海軍の合同演習を見学するようにいわれ、幹部数名のお供をして「長鯨」に乗艦、広島の師団長始め幹部も一緒に山口県に向かった。敵前上陸演習であった。その時湯田温泉に一泊したのであるが、暇があって山口市内を散歩していると全く偶然、和服着流しの時岡君に会った。図書館の帰りだということで彼の家に寄った。別府の病院を退院し待機中で、近く佐世保へ出勤するというので、是非呉に転勤させて貰って呉に来いよと誘った。数日後これに応えて呉鎮附になり、呉団長承命服務で出勤してきた。呉団では二人のために旧防備隊通用口の衛兵詰所を私室に定めてくれ、二人だけの自由な部屋になった。（時岡君とは一号５部で一緒であったが、これ以後特に親しく交際して貰った）

この頃水野享君が新編成特陸の小隊長として、旧防備隊兵舎に来ており、またコレスの川崎良太機少尉（神戸二中同級）が呉団附で着任、いずれも短期間一緒であった。呉団には６５期の方がよく来られ、前述橋爪中尉の外本図眞砂夫中尉、長船主基穂中尉、国生直扶中尉（三号１５分隊時の一号）を覚えている。

昭和１６年初、「鬼怒」が油津に行くのに、時岡君と二人乗艦実習に出張させて貰った。航海士が武藤晴男少尉で、傍で実習させて貰った。豊後水道で速力試験のとき、高速になると私は位置がうまく入らず、知識だけでは役に立たぬことを思い知らされた。

この冬、数名のミニクラス会をレスでやるというので、時岡君が「マントを着ていきゃ分かりはせんよ」と、一緒にレスに始めて行った。そのうちに「候補生が来とるぞ」と他の部屋に伝わり、「怪しからん」とコレスの連中が飛び込んできて、皆が訳を言ってくれた。この席竹谷君がいて芸達者だったのを覚えているが、他のメンバーは忘れた。

その後下宿を借り兄のプレンを取り寄せて、時時プレンで町に出たが、その頃田中啓嗣君と三人浄水場あたりで撮った写真が残っている。

この春６８期が少尉に任官、兵科は殆ど顔見知りでよいのだが、他科の新少尉にはこちらから敬礼しなければならない時を迎えた。当時乗艦しなければ任官できぬと思われ、早く乗艦さ

せて貰いたいと気持ちが焦り始めた。６９期の卒業で或いは一緒にと思っていたが、何の音沙汰もなく、６９期が「山城」「那智」「羽黒」「北上」「木曽」という 変則艦隊巡航から帰った後、４月２１日付やっと山城乗組を命じられ、自称「特務候補生」は勇躍横須賀に向かった。

――操作系统操作系统操作系操作系统操作系统操作系操作系统操作系统操作系操作系统操作系统操作系操作系统操作系统操作系操作系統操作系統操作系

（佐々木注）２００５年１１月１９日作成
原題「新庄記録（３）」原文はＡ４判　９ページ（ページ番号なし）　以下、原文をそのままに、欄外にページ番号を付与したもの。

Ｈ１７．６
新庄直常

回　想（２）

４．山城乗組

昭和１６年４月２１日付で同時に山城乗組になった仲間は、横団から上村、宮島両君、少し時期がずれて内海、上原両君、機関科コレス小林好美君を覚えている。６９期の巡航を指導した吉村五郎君がそのまま残って、ケプガンとしてしばらく我々の指導にも当たってくれた。

宮島君は砲術士、衛兵副司令、病室以来のつきあいでよく行をともにした。同じ信州人の上村君は遠航に出たものの、腎臓病で途中入院、以後特殊の療法で治療した由で（６７期海軍史に記載あり）、山城では発令所長だったかと思う。私は通信士、通信長が欠員で運用長が兼任して居られ、実務は選修学生出の優秀な電信長（兵曹長）が切り回し、私は重要暗号を担当するくらいであった。

着任して間もなく、クラスから「佐伯が重態だから見舞いに行ってくれ」との連絡があり、我々は早速揃って横病に行った。あの豪傑の佐伯君が痩せ衰えて見るも哀れな体を横たえているのを見てショックであった。遠航後に発病した彼は「病気なんかは精神力で治る」と彼なりに頑張っていたそうだが、Ｔ．Ｂ．が全身に廻って、５月１２日になくなったのであった。

「山城」は砲校の練習艦になっており、学生、練習生の実習のため屡々伊豆諸島沖あたりへ日帰りで出港した。一番多かったのは、普練の副砲射撃で、殆ど子砲だが、練習生が、「番換え」「番替え」で同じ事を繰り返すので、くたびれるのは副砲長。そのうちに「候補生指揮所へ」と言われ、我々は願ってもない射撃指揮の実習をさせて貰った。高い指揮所から見ると子砲用の標的は近すぎて俯瞰しているようで、実戦的ではなかった。我々も飽きるほどやらせて貰った。副砲の実射もあったが、主砲の実射（弱装）も一度体験した。一番騒々しいのは、機銃、高角砲の対空射撃であった。

「山城」には分隊長として６２期伏見博英大尉が乗って居られ、ご体調は優れぬご様子であったが、航海直はお好みでよく艦橋に居られた。入港すると艦長に次いで上陸され、軍令部へよく行かれるらしく、時々「ガンルーム集まれ」と後甲板に我々を集め、最新ニュースを披露して下さった。ある日「米戦艦では測距儀が取り外されている。どうも電探がこれに代わったらしい」という駐在武官情報を聞き、「電探」を始めて知った。

「山城」では時々新兵器試作品の実験もあった。無線操縦の９４水偵や、速力の外観を偽装するウエーキの消去実験などを思い出す。

これより先６月頃吉村君が転出、例のケプガン問題を解決するため食事時には士官室から６５期粟屋輝太郎中尉が来られるようになった。その夏航海長に高橋優教官が着任された。私は一号五分隊時分隊監事だったので、格別お世話になった。

この年横須賀の梅雨は特に長く、当直やチャージでズブ濡れになり乾く暇もなく、私は遂に下痢が続くようになって閉口した。医務室の薬では利かず、宮島君の下宿のオバさんがゲンノショウコを煎じてくれたりしても治らず、痩せてしまった。ある日町の薬屋で、チャコール錠という炭の粉を勧められやっと止まったが、約一月かかった。

その秋「山城」も艦隊編入を控え臨戦準備に入った。ここで我々は残念ながら「不要物件陸揚げ」の対象となって、１０月１５日付横須賀海兵団附で退艦した。この日は６７期の大多数が中尉に進級した日であった。

５．横須賀海兵団勤務

（１）開戦前の横団

着任して一週間、１６年１０月２３日宇佐空で橋本進次、宮川清両君がペアで殉職してしまった。海軍大尉となった二人の遺骨が東京に帰った日、クラス十余名は東京駅に出迎え、それぞれ両家に分かれてご自宅までお供をした。私は橋本家へ。中尉のクラスメートの中で候補生でお供し、お通夜は数名で思い出話をしながら徹夜をしてしまった。そのご縁で、橋本母堂とは戦後まで文通していた。

１１月１日我々も６９期と同時にやっと少尉に任官した。１１月１５日には７０期が卒業し、新候補生１０名が着任してガンルームは賑やかになった。

１１月２０日、海兵団は３分割され、新兵教育等は第二海兵団（後の武山海兵団）となり、軍港警備は横須賀警備隊、残余の補充等は第一海兵団となった。ガンルームはそのまま合同だったが、進藤君は警備隊警備士、上村、宮島、榎本君も警備隊で、それぞれ防空砲台の砲台長に派遣された。私は第一海兵団で、衛兵分隊の分隊士兼衛兵副司令、特務少尉とダブルで、主に副司令の仕事をしていた。

（２）クラス会

その頃横須賀に入港していた艦隊乗員を迎え、進藤君が幹事役でクラス会があった。当日は潜水艦メンバーが多数参加していたが、我々は開戦直前だとは知らなかった。我々の知る情報は娑婆と殆ど変わらなかった。開戦後最初のクラス会は、このメンバーが帰還して盛大に行われた。横空にも常時数名配されていて、進藤君が土空教官に転出した後は、クラス会の世話は横空の横山岳夫君や青木君等がやってくれた。

（３）俘虜収容所

開戦で一時外出禁止になる等、大いに緊張したが、続く戦勝のニュースで直ぐほぐれてしまっていた。間もなく俘虜が内地に送られてきた。接収した横浜の外人住宅を臨時の収容所として、横警管轄で進藤警備士が担当、そちらに詰めることが多くなった。１７年始めころ、私も臨時に進藤君の代わりに詰めたことがあった。拳銃武装、軍刀をさげて出向いた。衛兵も小銃武装して２名が当直監視していた。

私が行ったとき俘虜は１０名ばかりで、軍人は水兵１人、他は軍属だった。私が当直中にも外務省の車で１人が連行されてきた。接収した二軒続きの住宅の片方を収容所に、他方を衛兵

宿舎にしていた。俘虜の方はメードが１人給食等に当たり、食事の献立は衛兵の食事より数等上等に見られ、優遇し過ぎに思われた。

後に大船に本格的な収容所ができ、やがて水野享君が一時担当したため戦後戦犯容疑に指名されたと聞いたが、甚だ心外であった。

（４）講演会

開戦後引き揚げ駐在武官等の講演会が横鎮講堂であり、度々聴講した。ドイツ帰りの武官の話は誠に勇ましく、ご自分も得意顔で話されたが、対照的にアメリカ帰りの武官の話は深刻で、例のビンソン計画が加速して兵力差は時間とともに深刻になること、又航空機搭乗員の教育など、アメリカでは民間でライセンスを取らせ、航空隊では実用機の段階からだから早い、日本では基礎から全部航空隊で教育するので、多くの優秀な戦力を教官教員に割かねばならぬ、その差は極めて大きいという話は、全くだと案じられた。

（５）合同葬

１７年２月頃から横鎮でも戦死者の合同葬儀が行われるようになり、そのつど儀仗隊を第一海兵団で編成して出していた。１個小隊か１個中隊であったが・私はよくその第一小隊長をつとめ、弔銃発射を担当した。中隊の時は軍楽隊がつき、小隊の時は掌信号兵のラッパであった。吹奏された「命を捨てて」の曲は今も耳に残っている。中隊長は６４期の宇都豊大尉を覚えている。

横鎮合同葬儀に６７期で最初に祀られたのは、小笠原健樹君であった。遺骨を品川区のお宅へクラスで護送し、我々もお供をした。その後合同葬は回を重ねることになり、級友の何人かをお送りすることになる。

（６）九軍神合同葬儀

ハワイ特潜が公表されて間もない４月８日、日比谷公園で九軍神の合同葬儀が行われた。儀仗隊は横一団で編成され、中隊長は６４期の金原礼一大尉だったと思う。私はその第一小隊長を勤めた。新橋駅で内藤清五軍楽長率いる東京軍楽隊と合同した。海軍省に祀られていた九軍神の遺骨は、砲車に乗せられて出発、砲車の側と後にはクラスの何人かが随従していた。喪章を着けた軍艦旗が続きその後に軍楽隊儀仗隊が随った。

式は嶋田海相が委員長として型どおり厳粛に進められ、例によって私は弔銃を指揮したが、式後儀仗隊は直ぐ退場したのでクラスメートとは目礼しただけだった。

（７）ドウリットル空襲

４月１８日、警戒警報に半信半疑で居ると、「空襲警報」となり、「対空戦闘配置につけ」で、部署のあるものはそれぞれ配置についたが、大所帯の海兵団で、大部分は配置無く、我々も兵舎二階のガンルームで窓から眺めている次第。機銃も少しはあったらしいが、練兵場には白い事業服で小銃武装した小隊が一列横隊に並び、「何倍前をねらえ」の対空戦闘。そこに房総方面から双発一機が侵入、横鎮の真上あたりから工廠方面に直進、胴体や翼下のマークが鮮明に見えた。対空機銃の音がやかましく鳴る中、一瞬の間に通過し、工廠方面で小さい爆発音が聞こえたが、敵機は悠々と北西方面へ消え去った。

被害について我々の耳には入らなかったが、隣の横病では味方の小銃弾等が落下したとのことであった。

（８）巡察将校

軍港地区では毎晩巡邏が３名１組で市内を巡回しており、横須賀地区（田浦地区は別）では普段横警が担当し、半舷上陸の日は、各部隊、学校が輪番で巡察将校を出すことになっていた。巡察将校には下士官兵の巡邏が従って巡回に出る。横一団の番の時には私がよくその役目を引き受けた。巡路は別に決まっていなかったが、必ず回らなければならないところに遊廓が２ヶ所あり、そこにはそれぞれ衛兵詰所があって横警から派遣された下士官が詰めていた。娼婦が泊まり客の所属官氏名を届けに来ていた。

初めは張り切って出ていたが、段々厭な仕事だなと思うようになった。幸い私の当番の時に事件や事故はなかった。

（９）航空兵器整備学生

開戦前横空に来ていた青木貞雄君は航空兵器整備の学生を経て、その草分けの教官になっていた。横警の上村、宮島、榎本の３君も１７年５月頃その学生となり、横空へ転出していった。後に館山にその専門の洲崎航空隊ができると皆そちらに配された。

（１０）軍法会議

１７年５月横鎮から軍法会議判士任命の辞令を貰い三度ばかり公判に出た。裁判長は佐官級の兵科将校の判士、別に法務官の判士がいて、３名が裁判官であった。検察官は別の法務官が勤めていた。

被告は兵員は少なく、工員が大半だった。徴用中逃亡とか窃盗とかで、およそ軍法会議らしくないものだった。

判決は殆ど法務官判士の意見のままで、我々は判決書に署名捺印するのだった。

（１１）逃亡事件

私のデスクは先任衛兵伍長室にあった。同室には特務中尉の分隊長衛兵司令の下、特務少尉の分隊士、副司令以下先任衛兵伍長３名、補助員の下士官兵５、６名がいた。すぐ廊下を隔てた部屋は、刑余者ばかりを集めた第１１分隊で、担当の下士官兵は、柔道部や短艇部の屈強な者を揃えていた。（その部屋の２階がガンルームだった）

仕事柄憲兵隊や警察とは交流があり、時々往き来していた。憲兵隊や警察は、犯罪捜査や情報収集に地元の暴力団を利用していたので、私もその事務所にも顔を出した。彼らは侠客気取りで彼らなりの正義感を持ち、我々に協力的であった。

さて、先任伍長室補助員の最年少の３水は、後発航期罪の刑余者が来ていて、性質もよく可愛がられていたが、舞鎮の復活で転籍になり、舞団へ転出した。その後任として同様刑余者の３水が来たので前任者同様皆が可愛がっていたところ、１７年始め頃のある休日、その３水が先任伍長の一人に招かれて外出したのにその家に現れず、そのまま逃亡してしまった。

やむなく憲兵隊、警察に捜索を依頼するという面目ない羽目となった。数日後同年兵の留守宅に現れたとの通知があり、護送されてきた。まだ私は判士任命前のこと、その軍法会議の傍聴に行った。弁護士を伴って現れたその３水、日頃とは打って変わって、我々の悪口雑言、虚言を交えて並べ立てた。裁判長は「傍聴席に関係者は居ないか」と尋ね、怒りをこらえていた先任伍長の一人が立とうとすると、衛兵司令がキツく押さえてしまった。私も不満だったが、後から思うと、我々に直接被害がなければ、少しでも被告を有利にしてやろうと思われた衛兵司令の親心だったかと、年の功を感じた。

（１２）再入院

１７年６月頃逓信講習所を出て、「技生」として海軍に入った少年達４０名ばかりを受け持たされた。彼らは間もなく各見張所に通信や電探の要員として派遣された。その彼らを見送ることなく、私は６月末には又体調を悪くして受診、手術のため７月２日から１０日間横須賀海仁会病院に入院させられた。そして退院すると今度は保健班主任附を命じられ、久里浜海岸兵舎に派遣されてしまった。

（１３）久里浜の保健班

久里浜海岸は綺麗な砂浜で、ペリー上陸地の東（北）隣に板塀で囲った兵舎（平屋建）１０棟ばかりと本部棟があった。当時ペリー上陸記念碑表面は大きく赤ペンキで 「米英撃滅」（米英にはけもの偏付）とか書かれていた。この兵舎群は、開戦前落下傘部隊の基礎訓練用基地として人里離れた場所を選んで建てられたもので、空いた兵舎を横一団が管理し、１棟は衛兵隊と主計、看護の派遣員が使用し、保健班は３棟を使用していた。

交通不便で、横一団本部からオート三輪の定期便が１日１回あり、その他には京浜急行が浦賀まで、そこから満員の木炭バスを利用するか、歩くしかなかった。

保健班主任は在任とは限らず、空席の場合は主任附が代行する。主任では６４期の大川秀四郎さんを覚えている。主任附は既に６９期１名と７０期３名が
居たが、それぞれ短期間に転出していった。軍医は応召の軍医大尉が専任で常勤して居られた。秋には住山徳雄君が主任附として着任し同室で楽しく過ごした。保健行軍は楽しみで、野比あたりまで海岸をよく歩いた。時には漁師に頼んで地曳網を引いたこともあった。

ア．沈没艦船乗員収容

１７年夏から秋にかけて、久里浜の空き兵舎は屡々沈没艦船生存乗員の収容所に使われた。士官室は共用だったので、いろいろ実戦談を聞かせて貰った。特に記憶しているのは、まず「龍驤」乗員のこと。士官室に入ってきた航海士が小学校同級生で、神戸一中から高等商船に行った予備少尉（しかもその父君が神戸二中の校長だった）で驚いた。

数日後横病から退院してこられた６２期の零戦隊長納富健次郎大尉からは、壮絶な実戦談を伺った。先に珊瑚海海戦で乗艦「祥鳳」沈没を経験して居られ、今度は空戦中敵弾で左上腕を負傷して利かなくなり、右手だけで操縦しながら帰還すると、母艦は既になく、駆逐艦の側に着水しようとした。右手でフラップを出そうとしたが、フラップが出ずに脚が出てしまった。そのまま着水前倒、額を打って失神しているところを救出された、と。まだ頭も腕も包帯であった。

次ぎに印象深い記憶。第３次ソロモンの「比叡」乗員を収容したとき、その方位盤射手の特務少尉が、「戦果報告に際して、自艦の命中弾でないと言っても、上司は自艦の戦果として報告してしまった」と語り、複雑な気持ちになった。

イ．合同葬と級友

１７年秋には横鎮の合同葬が何回か行われた。クラスの何人かが祀られたが、そのつど横空の青木君が主になって世話してくれていた。特に覚えているのは、中村竜夫君、安達享爾君、福田拓君、笹井淳一君、佐藤亮三君である。佐藤君については、私が遺骨護送者に指名され、愛知県のご自宅まで護送した。（「若桜」に報告記事あり）

この頃久里浜から遠からぬ野比病は海岸松林の中にあって結核の療養所に使われていたが、

入院中の遠藤光男君を見舞ったことがある。彼はそのまま再起できず、気の毒なことであった。

野比病にはその後松田義雄君を見舞ったが、まだ元気そうで回復されるものと思っていた。

この年６月１日には６６期が大尉、６８期が中尉、７０期が少尉に進級（任官）していたが、１１月１日には６９期が中尉に進級し、私もやっと中尉になった。

ウ．横一特の再編成

１７年の秋も深まったころ、横一特（落下傘部隊）が、体操の神様と言われていた堀内豊秋中佐（５０期）に率いられて古巣の久里浜に帰ってきた。クラスの齋藤実君はひときわ元気で、士官室の空気も一変した。片言のインドネシア語が飛び交い、持ち帰った短波ラジオからは米軍の下手な日本語放送が流れていた。

間もなく横一特の編成替えがあり、司令は５６期唐島辰男中佐、副官は６６期山辺雅男大尉、第１中隊長齋藤実中尉、第２中隊長は６８期竹之内光男中尉、軍中も東大出や慶大出が揃い、全く優秀メンバーだった。

彼等は実戦の経験から、３８式小銃を二つに切って組立式にし、ズボンの両側に入るように改造したり、士官も白兵戦では刀より槍の方が良いからと伸縮自在の金属製の槍を考案したり、又あの重い無線機を軽量に改良するなど真剣に取り組んでいた。兵員も優秀で、全員溌剌として気持ちの良い部隊であった。　毎日午前午後とも徒手体操の時間があり、司令以下全員参加して基礎体力作りに励み、特製の台上から飛び降りる着地訓練もやっていた。久里浜の基礎訓練後、翌年館空に移って実用訓練に入ったが、何人かの犠牲者が出たと聞いた。せっかくの訓練にも拘わらず、実力を発揮する機会無く、サイパン防衛戦で玉砕したことは、如何にも残念なことである。

エ．電探講話

１７年秋、近くの通信学校に檜垣君が来ていて、屡々会っていた。ある日通校に技研の技師が来て電探の話があるが、聴講に来ないかと誘ってくれた。早速出かけて聞かせて貰ったが、その新川技師の話は、構造原理を素人にもわかりやすく説明してくれ、又兵器生産の現状や英米との比較も話された。　英米はテレビ技術が進んでおり、日本は約５年は遅れていて、とても追いつけぬこと、英国はドイツの空襲に際して偶然電波の乱れから電波警戒機を発明、直ぐ電探に進んでいること、日本では陸上対空見張用の大型（能力は低い）１号機が１７年１月にやっと千葉県勝浦に設置されたこと、シンガポール占領時英電探を押収したが、トレーラー型の移動式であったこと、日本では指向性のアンテナで困っていたが、彼等は、日本人の発明した八木アンテナを使っていたこと等々、口惜しい話を聞いて強く印象に残った。

６．通信学校特修科学生

（１）特修科学生

昭和１８年初頭中村〔悌〕君から電話があり、「人事局員から、新庄の病気も治まっているようだが、乗艦は無理としても何か希望はないかと尋ねられた」とのことであった。丁度その頃６３期の三沢忠雄大尉（軍令部ロシア語班）にお目にかかる機会があり、外語の委託学生の話を聞いていたので、兵学校で基礎を習ってきたこともあって「ロシア語の委託学生にしていただけないが」と返事をした。数日後中村君から「委託学生はもうその余裕がない。６ヶ月教程で電探の特修科学生はどうか」との人事局員の意向が伝えられた。私は二つ返事で「そんな

良い道があるのなら、是非お願いしたい」と申し出ておいた。

１８年４月１日付通信学校特修科学生を命じられ、４月５日着任、学生舎に入って檜垣君と同室になった。第３４期特修科学生は私一人だけ、教育計画書によれば、教官は十数名書かれていたが、電探専門は全くなし。

まず無線理論を自習せよと、文官大谷教授が高等科学生用に作られたガリ版刷りプリントを渡された。兵学校の物理の復習のようなものだが、こちらは微分方程式を駆使しているので、数学の復習も兼ねたようなものだった。肝心の超短波理論が欠けていたので、後に自分で書店にあった参考書を見付けて、全く自学自習に努めた。学生舎は高等科学生用で、当時高等科学生は６３期を主とし、６２期の方が数名居られたが、殆ど自宅通学で、学生舎宿泊は稀だった。

（２）技研出張

５月に入ると、技研で行われる新任技術士官の電探専攻者に対する講習に参加するよう命じられ、目黒に通うことになった。２，３ヶ月はかかるというので、荻窪の叔父に頼んで居候をさせて貰い、省電で通うことにした。

技術中少尉２０名ばかり、講師は技研の技術士官や技師で、有名な伊藤庸二技術中佐の講義も拝聴した。毎日講義と実習（兵器の分解組立、試験等）だったが，簡単な専門用語が分からなかったり、結線図は理解しても、その部品の抵抗やコンデンサーの実物が分からなかったり、半田付けが下手だったり、私には困る事が多かったが、見よう見真似で何とか皆についていった。

途中何度も兵器製造中の民間工場（東芝、日本電気、日本無線等）の各工場へ見学に出かけた。そこでは陸軍の電探も作っており、陸海軍互いに機密扱いにして、民間会社は双方とも良く知っているというバカげた実態も知った。横須賀の空技廠では航空機用に小型軽量化した電探を開発しており、これも見学した。これは後に航空機だけでなく、陸上用、艦船用にも採用され、１３号として重宝された。

日本のテレビ開発の実状も見学に行った。祖師ヶ谷大蔵に放送局（現ＮＨＫ）の研究所があり、短距離での放送実験中だった。当時技術的な立ち遅れが目立ち、超短波用の真空管やブラウン管の生産が難しく、空中線き電線の調整も難儀しており、戦後のテレビから考えると、嘘のような幼稚な段階だった。

（３）実習

１８年８月技研講習の総仕上げとして、九十九里大東岬へ実習に行った。海岸（４０メートルばかりの崖の上）に技研の実験用電探が何台か並べてあり、近くの長生村の技研宿舎に泊まり込みで２週間ばかり毎日狭い電探室で汗だくの実習を行った。技術士官達の指導官は５１期の吉井道教中佐で、私もいろいろお世話になった。休憩時間には海岸に下りて土用波と戯れたこともあった。

技研出張はこれで終わり、９月通校に帰った。

（４）卒業

電探の特修科学性はその後もなく、この間１８年５月に６１期（通信出）の岡崎佐平大尉が１人で電探の専攻学生になられ、８月末私より一足先に卒業されていた。９月帰校すると岡崎大尉が私の指導官も兼ねられ早速幾つかの卒業課題を出された。その幾つかは、下士官教員に対するような課題で、私は不承不承ながら回答を提出、９月３０日付卒業、即日教官兼分隊長

となった。
　一緒だった技術士官のうちから優秀な３名が同日通校教官を発令され、研究部に入った。

――

(佐々木注)　２００６年８月２６日作成
原題「新庄回想」原文はＢ５判　７ページ(ページ番号なし)。
以下、原文をそのままＡ４判に変換し、欄外にページを付与したもの。

Ｈ１８．１
新庄直常

回　　想　（３）

７．横須賀通信学校教官

（１）普練教官

　　１８年１０月電探は既に前線に配備され、その要員は通校で逐次養成して送り出していた。９月末防府通信学校ができて、久里浜の通校は横須賀通信学校と改称された。私は１０月編成の第３期普練の隊長兼３個分隊の分隊長（全部で５個分隊）を命じられた。教務では，分隊長は無線理論を担当することになっていた。電測科長は野崎虎雄中佐（５０期）普電測練習生隊長は前田少佐（５１期？）だった。
　当惑したのは、いきなり通校の柔道主任を命じられたことである。私は兵学校卒業前入室中にお情け初段を頂いただけで、病み上がりでもありとても主任は勤まらないと思ったが，他に居ないからやってくれとのことでやむを得ず引き受け、数ヶ月間始めての黒帯で道場に立った。
　普練の教程は約６ヶ月で、晩秋には実習が始まり、銚子の手前豊里村に作った実習場に分隊士と交代で数回泊まり込みの出張をした。
　研究部では、艦隊等からの問い合わせにも対応し、私も時々臨時講師として説明役を仰せつかった。
　敵の電探射撃に圧倒されている前線の実状から、射撃用の電探の開発が急がれており、茅ヶ崎海岸の実験場で陸海軍ともそれぞれ試作品を実験中で、測的専門家も教官に配員された。
　所謂逆探は、実用化して小艦艇にまで急ぎ装備された。敵電探を欺瞞するアルミ箔散布は、最初功を奏したが、後には敵に大量に散布され、逆転してしまった。その他味方識別など課題は山積していた。
　岡崎先輩は、「教範」「操式」の作成に専念され、その検討会に屡々呼び出されていた。

（２）ＧＫＦ現地指導に出張

　　１９年２月、ＧＫＦの要請により現地指導員を派遣することになった。野崎科長は先行して下見をされ、指導員には、私を長として松本特務中尉、松下特務少尉，小西上曹を指名された。遠航に行けなかった私としては始めての渡航、まして戦地に行けるとあって、大変な喜びだった。しかしその司令部スラバヤまで行くのが大変だった。
　２月下旬台北まで日航便と決まり、第一日はダグラス双発で福岡泊まり、高度４０００メートル位で雪の富士山は美しかったが、せっかくの折り詰め弁当は網棚でバリバリに凍ってしまった。鈴鹿上空ではエアポケットに何度も突っ込んでよく揺れ、瀬戸内上空へ出て暖かくなる

とやっと安定して、懐かしい風景を楽しんだ。
第２日は同じ機で上海に向かう。山のない陸地を初めて見て着陸、給油後舟山列島とおぼしき多島海上を南下、間もなく赤茶けた山肌と緑の山が見え台北空港着、海軍部に出頭して次の便を依頼、数日待つ間近くの町を見学。
やがてシンガポール行きに搭乗、同じくダグラス双発。この第一日は香港泊、整備の都合で１日延期、市内見学で山にも登る。物価が内地の１０倍位で驚く。
第３日は海南島海口と三亜を経由してサイゴン泊。この頃から敵機の来襲あるやも知れず、乗客も見張りを厳にしてくれと言われる。夕刻サイゴン着。私だけ水交社を指定され、「高橋大尉と同室で」と言われる。翌朝窓の音で目を覚まし、蚊帳の中から「お早うございます」と挨拶し、よく見ると高橋渡喜男君だった。この地の航空隊にいて今日はバタビア行きだという。空港まで彼の車に便乗した。
第４日無事シンガポール着、遠い市内にある１ＫＦと１０Ｂｇに挨拶、ここで分担をきめ、１ＫＦは松下少尉、２，３ＫＦは私と小西教員，４ＫＦは松下中尉とし、松下少尉と別れ、他の３名のスラバヤ行き便を依頼した。私はセレター軍港の工作部に挨拶、工作部の軍医長が、久里浜保健班の応召軍医長で，再会を喜ぶ。
数日後スラバヤ行き陸攻便（がらんとして、バナナや自転車の乗せてある貨物便）に便乗、窓際銃座に坐り、見張りを兼ねる。ジャワ海の島々を見ながら数時間、次第に気温が下がって寒くなり、防寒用衣料を全部台北に預けてきたことを後悔、トイレのないことにも閉口、やっとスラバヤ着、（東京から２０日かかった）外は酷暑だった。　スラバヤの町は平穏そのもの、ＧＫＦ（兼２ＫＦ）司令部に挨拶、担当は通信参謀久住忠男中佐（５６期）、ここには熱海光雄君が居て、随分世話になった。まず「貴様３月１５日付で大尉に進級して居るぞ」と教えて貰い、早速襟章を貰ったり、三種軍装では暑かろうと防暑服を貰ったり、水交社はシャワーだけだからと、司令部のバスに入れて貰ったり、などである。
（３）２ＫＦ現地指導
通信参謀からＧＫＦの電探配備状況を聞き、まだ数カ所配備したばかりとのことに驚いた。ここで松本中尉は４ＫＦアンボン行きの手配を頼み、小西教員はマヅラ島に先行、私は東隣のバリ島に飛び、その後マヅラ島で合同することにした。
ア、バリ島見張所
バリ島主要都市（当時は田舎町）デンパサルの空港着、警備隊に挨拶、車で島の南端プチャット岬に送ってもらう。海抜数十メートルの高台に１１号電探が据えられ近くに兵舎兼電信室、発電機室がある。１１号電探は、６平方メートルほどの小屋が、そのまま円形のレール上をモーターで旋回するようになっていて、（当時アンテナだけを回転することが技術的にできなかった）相当な重量があり、装備と運搬には制約があって、道路の建設から大変だった。　見張り所長は予備学生出の少尉で、兵員２０名弱だった。私は早速持参した器機を使って兵器をテストしアドバイスを試みた。テスト中何もないはずの南の洋上数十キロに固定目標エコーが出現、これは１８０度後方の山らしいのだが、これを消すため既にいろいろ工夫したが成功せず、近く丘上からやや下の斜面に移設の予定とのことだった。また別に判断のできない流れ動くエコーを見たり、指導どころか、次々と未知の経験をさせて貰った。ここでは敵機らしいエコーは全く見なかった。バリ島での初仕事は３日ほどで終わり、警備隊に報告、副長の厚意で

飛行機を待つ１日、箱根に似た避暑地のキンタマニーへドライブさせて貰った。

飛行場周辺には高角砲が並んでいたが、その半分以上は丸太の欺物だと聞いた。スラバヤまで１時間で飛び、司令部に報告、次いでマヅラ島に渡った。

イ　マヅラ島見張所

見張所はマヅラ島東端沖の小島にある。スラバヤ港から連絡船で島の西端に渡り、軽便鉄道で、終点のパメカサンへ、そこから迎えの車で島の東端まで行き、渡船で見張所へ、１日がかりだった。小西教員も元気で迎えてくれた。ここも所長は東大出の予備少尉、その夜早速敵機捕捉、大型単機だった。３日ばかり滞在中毎晩敵機を捕捉したが、１回はスラバヤ港付近に被害があった。帰途は車で西端まで送ってもらい、半日でスラバヤに帰った。

ウ　当時の現地事情

バリ島では、椰子の木の疎林、サボテンの生け垣、ニッパハウスの町に、現地人が裸足で歩いていた。当時「女御が島」と聞いていたが、実際は女がよく働き、男は昼間闘鶏用の鶏の手入れに余念がないという実状だった。働かなくても食べるものは豊富で困らないようであった。

第２日所長が夕食に牛肉をご馳走するとのこと、その昼頃木陰に１頭の牛が繋がれていた。これがその牛だという、まさか１頭買うとはと驚いていると、「牛は１頭１５円と安い。鶏は一羽雌が１円、雄が１円５０銭で割り高だ」ということだった。ただし一頭屠ると、冷蔵庫もない熱帯地で、３度３度食べなければならない。

その夜所長が土地の酋長に頼んで、夕刻から土地の踊りを見せてくれた。空き地に村の衆が集まってきて、コーヒーや果物の屋台店まで出るなか、頭にはキラキラと輝く冠を飾り、煌めくような金糸刺繍を着た舞姫が現れ、打楽器数種類のお囃しを伴奏にして、静かな舞を見せてくれた。観光用と異なり、神聖な舞とのことだった。

次の夜は、同じ空き地で闘鶏を見せてくれた。この日のために日頃手入れした自慢のシャモを持ってきて観衆の輪の中で２羽が戦う。鶏の踵には小刀がくくりつけてあり、互いに蹴りあって戦ううち、致命傷を受けた方が倒れると、勝った方はトドメを刺すまで蹴る。勝者の飼い主は負けた鶏の片足を持ち帰って家の軒に吊して誇りとする由。観衆は互いに賭をするが、多くても１０銭くらいとのことだった。

マヅラ島見張所では現地兵を使っていた。彼等の視力、聴力は抜群に優れ、見張りには最適だった。マヅラ島も生水は飲めず、井戸水で水浴をしたが、井戸端で小僧がタバコ１本の駄賃で水を汲んでくれた。現地のタバコは軽くて１日３０本くらいでも指にヤニが残らず、つい数が増えて癖になり、後で困ったものであった。

バリ島でも、マヅラ島でも道路は未舗装だが、沿線住民が奉仕的に整備していて、車は快適に走れた。これはオランダ人の躾だったらしい。

沿道の田圃は、或いは青々とし、或いは黄色く実り、または刈り入れた後と、まちまちだった。大半が焼き畑式で、実れば穂だけ摘み取って後は火をつけて焼き、そのあとに播種して生育を待つそうである。当時日本の農業指導員が入って日本式の生産指導をしたらしいが、働かなくても食える現地民には反感を持たれ、一揆を起こしたところもあると聞いた。彼等の主食はタロ芋だった。四季のない土地の現地人（特に老人）は暦を知らず、自分の年齢も分からぬ者があるとのことで、出会った老人に何歳かと尋ねると、約何歳と答えるという。オランダ占

領下では現地民はオランダ人と対等に話をすることは許されず、必ず跪かねばものが言えなかったが、日本人は背も低く、皮膚の色も似て、対等に話が出来ると喜んでおり、日本人によって解放されると信じているようだった。

エ、バリックパパン

スラバヤに帰ると、次はバリックパパンに行くことになった。飛行機を待つ間、一夕司令部の慰労歓待を受け、熱海君も同席してくれた。その席上１ＫＦの三阪儀一君（元６７期）が当地に入院中と聞き、翌日郊外の病院に見舞った。その頃私も夕刻になるとやや悪寒がしたりして、また胸部疾患の復活かと案じていた。

いよいよ出発、バンジェルマシン経由でバリックパパンに向かった。機中隣席の人が私の腕を見て「デング熱の発疹ではないか、最初軽かった人は２度目は重症になるから注意せよ」と教えられた。私はどうせ直ぐ帰国するから心配ないと思って、そのまま忘れてしまった。

眼下見渡す限りの大森林に感心しながら、バリックパパン着。空港は町から大分遠く、町は製油所だけの殺風景なところに見えた。農作も不適だそうで、田畑は見られなかった。

特根司令部に挨拶、宿舎は軍医長官舎に同宿と決められ、数日世話になった。電探（１２号１基）は少し離れた裏山の森を少し切り開いて装備してあり、矢張り予備少尉が所長だった。食事は司令部で頂いたが、司令官は４０期の醍醐少将で、時々テニスをおやりになり、見張り所長がお相手に呼び出されていた。この滞在中夜間に敵飛行艇が単機低空で港湾に侵入した。途中どこの見張所も発見せず、いきなり港の見張員が発見報告した。翌朝早々に被雷船が出て機雷を投下したと判り、残念至極であった。当時敵機雷は精巧で掃海は困難を極めていた。

滞在中「鬼怒」が入港、山根孝雄君（３号同分隊）が通信長と知って訪ね、少時歓談したが、彼はその秋、レイテ島オルモックの連絡将校として派遣され、再び帰ることなく残念なことであった。

次は離島を巡回、（小西教員は残って新着兵器を組み立て）旧オランダ砲艦に便乗、本島に沿って南下、東南端近くのセブク島に至る。小さい島だが本島同様巨木が生い繁っていた。仮設桟橋から遠からぬ断崖上に見張り所と兵舎があり、１２号電探１基、所長は特務士官だった。如何にも島流しのようで、気の毒に思ったが、皆元気そうであった。近くに民間企業の木材伐採場があり、沖から見ると普通の丸太が海岸に並べてあるようであったが、近づくとその丸太が直径２メートルもある大木ばかりで驚かされた。１本切り出すのも、チエーンとウインチを使い大変なので、海岸から数十メートル、本島でも５００メートルぐらいしか切り出していないとのことだった。これをチエーンで筏に組みスラバヤの製材所まで曳航していくそうである。

次ぎはマカッサル海峡の中央部に点在する珊瑚礁のバラバラガン諸島に向かう。その１島には既に見張所があり、１３号１基が装備されていた。所長は特務士官。高さ２０メートルにも及ぶ椰子樹の上にアンテナを出すよう木製の櫓を組み、その下で操作していた。井戸はなく、天水を小屋の屋根からドラム缶に集めて使っていた。原住民はなく、セレベスの漁民が来ている由。

もう１カ所増設の候補地を探していたところ、環礁の一つに座礁した。あいにく満潮時で離礁まで１昼夜待つことになった。その間本島の視察の外環礁を歩いた。我々は履き物無しではとても歩けない。離礁の時には裸足の島民が大勢で押してくれ、離礁すると皆歓声を上げて喜んで見送ってくれた。

バリックパパンに帰ると小西教員は新着の兵器総てを組み立て、調整を終わって待っていてくれた。バリックパパンを辞し、小さい哨戒艇に便乗して夜の警戒航行でスラバヤに帰投した。これで２ＫＦの指導を終わり、次はフィリピンの３ＫＦに行くことになる。

（４）３ＫＦ（フィリピン）

丁度通信参謀がマニラに行く特別便（飛行艇？）に同行するように言われ、熱海君とも別れて、マカッサル、ケンダリー、メナド経由、夕刻には梅雨のような雨空のダバオに到着、水交社に入った。

特根と航戦の司令部が近くにあり、何かただならぬ様子に見えた。丁度その日にパラオから着く予定のＧＦ長官一行の２機の飛行艇がまだ着かず、消息が分からないらしいとのこと、(例の海軍乙事件、３月３１日であった)

我々は憂鬱な気分のまま翌日はマニラに飛んで３ＫＦ司令部に行った。３ＫＦではまだ電探配備は整わず、飛行場に設置しただけだとのことであった。

私は先任参謀に地図上で設置すべき適地を示して、説明しようとすると、先任参謀は「内地の人間は何も判っていない、それを机上の空論というのだ」と些か怒気を以て「そんなところにどうやって運ぶのだ、道路はない、桟橋はない、その周辺も途中も全部敵地だ」「日本軍が維持しているのは僅かな都市と飛行場だけだ」「マニラ周辺だって敵は強力な配備を維持している」とのことで、比島占領とはそういうことだったのかと始めて知った。

水交社で帰りの便を待つ間６５期富田正止大尉とご一緒になり、町を案内して頂いた。スラバヤと違って夜は街娼の客引きが横行し、子供の靴磨きやタバコのせびりが寄ってきた。これが三等国の姿かと思っていたが、戦後の東京はそっくりその通りであった。

世界の美景といわれるマニラ湾の夕陽を見たが、日没後短時間で真っ暗になり、薄暮のないことを体験、物騒な町を急いで帰った。

マニラでは電探の仕事無く、数日待って台北便に乗った。当時多数の帰国希望者が待っていたが、思ったより早く福岡便に乗せてくれた。早朝台北発、昼には福岡に着いた。丁度北支からの侍従武官の特別便があり、便乗を許された。偏西風に乗って驚くほど早く約３時間で羽田着、その日は４月２１日で、遅い桜に間に合った。久里浜までまた３時間、暗くなった横通校の食堂には残飯もなく、空腹のまま眠りについた。

――

(佐々木注)　２００６年９月２３日作成

原題「新庄回想（２）原文はＢ５判　１５ページ（ページ番号なし)。

以下、原文をそのままＡ４判に変換し、欄外にページを付与したもの。

Ｈ１８．９

新庄直常

回　想　（４）

8. 横須賀通信学校教官（２）

（１）帰校後の横通校

２ヶ月の出張から帰ると、横通校も若干変わっていた。私は第 5 期普電測練習生隊長兼分

隊長を命ぜられ、約 700 名の練習生を受け持った。この第 5 期普電測は、下士官候補者で、前年の学徒出陣時予備学生の選に漏れた者達で、卒業後は下士官を約束されていた。私はそのほか臨時に講師となったり、研究部の会議に列したり、多忙であった。電測部には、58 期綿貫舒之少佐（呉団で一緒）61 期今村正巳少佐（射撃用電探担当、今村均大将のご子息、広島出張中原爆により戦死）62 期百武伸安少佐（侍従長のご子息）が加わっていた。

この 9 月には電測部が独立して、藤沢郊外に電測学校を設立るする予定で、柴田少佐初め何名かの委員が藤沢で準備中であった。

待望の射撃用電探の試作機が出来て、教材用に装備され、砲術科の教員も配員されていた。

戦局の逼迫に伴い、7 月には横通校も兼久里浜第二警備隊となり、防空演習も随時行われた。私は飛び地のバラック兵舎群の防火隊長を命じられ、何度か訓練もあったが、まだ防空壕もなく、空襲には全く対応できないと思われた。

この頃事務室には女子事務員が採用され、和服モンペ姿が出入していた。

（２）比島方面急速戦備指導班

19 年 8 月 5 日科長から呼ばれ「今回比島方面急速戦備強化のため、各術科学校の教官教員で指導班を編制し、臨時ＧＦ司令部附として派遣されることになった。ついては電測術の方は君が前回の経験もあって適任と思う。通信科の方は大野広司少佐（63 期）が行くから、一緒に行ってくれ」と指名された。

翌 8 月 6 日は横鎮での連絡打ち合わせ、8 日には軍令部で打ち合わせ、があり、出発は 11 日と決められた。その間教務その他の申し継ぎやら後始末、ことに 9 月には藤沢への移転が決まっているのでその準備もあり、多忙を極めた。前回出張のときも第 3 期の卒業を見送れず、今度も第 5 期の卒業を見送れぬことが心残りであった。

後に当時 GF 司令部にいた二間瀬君から「貴様、とうとう着任の挨拶にも来なかったな」と言われた。

8 月 10 日夕刻直接横浜磯子の指定旅館に入って顔合わせをした。指導班長は館砲校長阿部孝壮中将、同校陸戦班が主力で、同校対空班、横砲校隊水上射撃班、水雷校の局地防御魚雷班、機雷校からは港湾防備班等それぞれ教官教員多数で、総勢 40 余名だった。

横浜空の 2 式大艇 1 機を専用機とし、翌 11 日離水出発した。2 式大艇は 2 階作りで、階下には窓がなく、教員用とされ、教官は 2 階に落ち着いた。通校からは、教員はなく、教官の中で私は最若年だった

（３）寄港地

ア　鹿児島

第一日は鹿児島着水、山の立派な旅館に入った。59 期柚木少佐、64 期吉本大尉を中心として、先輩達は浴衣がけで、局地防衛を真剣に討論された。陸戦用ロケット砲、海岸砲、洞窟からの魚雷発射、果ては人間魚雷、水際戦と耳新しい話を沢山聞いた。その夜突如空襲警報発令、敵一機西方より来襲と告げられ、出発前から敵近しの感を深くした。

イ　東港

次の日は幾分緊張した気分で台湾上空を飛び東港に着水。梅雨のような天気だった。ここでは官舎らしき宿舎に分宿。天候の都合で日程が一日延び、教官だけ車に分乗して高雄に赴いた。丘の上の立派な司令部で長官に挨拶、水交社では長官主催のレセプションに招かれた。帰

途は雨中舗装された道の両側、バナナ畑や甘藷畑を珍しく眺めた。

ウ　マニラ

次の日いよいよマニラへ飛びキャビテに着水した。車に分乗してマニラ湾を半周、市街地の司令部に入る。途中の道は、日本の田舎道の如き泥濘で、住民は道直しはせず、自分の家の前に泥よけを造っている。笑顔がなく、何となく敵意のようなものを感じる。このキャビテ、マニラ間にもゲリラが出没し、日本人は屡々攻撃される由。司令部では早速打ち合わせがあり、巡回の予定が決まった。電探配備については、この半年間で 10 カ所ほど設置し、各飛行場にも配備したとのことだった。

（4）比島現地指導

ア、ダバオ

特別機はダバオに飛んだ。ここは日本人街もあるくらいで、住民も親日的だった。宿舎は木造二階建ての第二水交社。32 特根司令部で早速打ち合わせがあった。中央での陸海いがみ合いとは違って、ダバオでは陸軍参謀が一人常駐しており、打ち合わせには他の参謀数名が参加するという緊密ぶりだった。

ここで聞く防備態勢は想像以上に貧弱であり、防備戦術が陸海軍で甚だしく異なるのが気がかりであった。第一に、航空兵力も防空能力も極めて微弱で、敵の航空攻撃には忽ち制空権を奪われるであろうと思われた。第二に、陸戦兵力も微力で、おそらくダバオ港深く市街地近くでも、敵の上陸は可能であろうと思われた。もっとも懸念されることは、陸軍では、戦訓にかんがみ水際戦は不可能と決め、敵上陸の際は奥の山地に退いて陣地戦で防戦する方針だという。一方海軍では、水際戦に敗れて敵の橋頭堡を許せば、後は時間の問題になるので、とにかく水際戦に秘策を尽くそうという。秘策と言っても、上陸前の高速魚雷艇、洞窟からの魚雷、人間魚雷、震洋による特攻、水際における、戦車壕、肉薄攻撃、トーチカと予備陣地移動による奇襲、ロケット砲、等が挙げられていた。

次ぎに憂慮すべきは陸軍が入手している情報によれば、フイリピンには敵ゲリラが組織的に配備され、ミンダナオ島奥地には敵飛行場も建設されている。補給も続けられていて、潜水艦によるﾙｰﾄを持ち、同島北部カガヤン付近にはその基地がある等であった。

既に敵の偵察爆撃があり、その日も空襲警報と同時に上空に双胴のロッキードが現れたが、事前の発見報告はなかった。ダバオの電探見張り所は、地形上敵機の捕捉率が悪く、徹夜監視に立ち会ったが、捕捉できても能力は極めて低かった。司令部が重点を置いている湾口東南端のｻﾝｵｰｶﾞｽチン岬が頼りと言われ、たまたま週一回の定期便が出るというので、早速一人便乗させてもらうことになった。

イ　サンオーガスチン

定期便は大発で、一日がかり。前日も湾内で魚雷攻撃を受けた船があったという物騒な湾である。小艇は総て屋根を草で覆い、岸近くを航行している。夕刻近くｻﾝｵｰｶﾞｽチンに着いた。桟橋はなく、砂浜に乗り上げる。兵舎から嬉しそうに飛び出してきた兵に背負われて上陸する。

兵舎と発電所は海岸にあり、見張り所は岬の山上にある。密林を切り開いて造った道路が地肌も鮮やかに数百メートル続いていた。ここには電探 4 基が並べてあった。しかし防空壕はない。一夜を見張り所で過ごす。ここには教え子 3 名が元気に勤めていた。

夜明け前、東岸近い海上に微光を発見、全員緊張して武装（但し小銃半数と軽機 2 挺しかな

い）結局何の灯か不明だった。軽便電信機の通信がうまく届かないとのことで出発前に大野少佐の指示を受け、短波用を中波用に改造し、成功したのは収穫であった。次の日同じ大発でダバオに帰投、ダバオの電探も調子が良くなったと嬉しい報告を受けた。

ハ　ザンボアンガ

次は中攻 2 機に分乗し、ミンダナオ島西南端ザンボアンガに移動、夕刻到着し、隣接する警備隊に一泊した。電探はこの南数十マイルのシバコ島に設置中で、翌日大発で赴いた。灯台の施設を利用、兵舎がほぼ完成、特務士官の見張り所長に電探の予備知識を教示し翌日帰った。この辺のスル-諸島住民はモロ族で精悍かつ器用、親日的と聞いた。その帰途大発上で急に悪寒を覚え、夕刻帰着報告してベッドに入ると悪寒甚だしく、翌朝、指導班一行はレイテ島方面に出発、一人残って病室に入った。デング熱と診断、40 度以上の熱が四日続いて 8 日目に退院、この間食物は受け付けず、警備隊から付けて貰った付き添い兵の探した果物で,のどを潤した。退院後、日本人経営の唯一軒のホテルで、マニラ行きの便を待った。ここで哨戒艇の艇長から内地に転勤する予備中尉と知り合った。マニラ定期航空便はもうなくなったので、臨時便があり次第知らせて貰うことにしていたところ、例のダバオ誤報事件があった。件の予備中尉が「今夜自分が艇長をしていた哨戒艇がマニラに向け出港するから一緒に乗って帰ろう」と言う。敵潜の巣のようなスルー海を通って帰るのもどうかと思案しているところへ、航空隊から、今すぐマニラ行きの便があるとの連絡があり、差し向けてくれたトラックで飛行場に急ぐと、ダグラス一機がスタート地点に着くところであった。二人で機長の下士官に便乗を頼んだが、「満身創痍で、誰も乗せてはならないと厳命を承けている」と拒否され、やむを得ず見送っている目の前で、エンジンから火を噴いて視界から消えた。思いも寄らないことに心乱され、二人は哨戒艇に便乗することに決心し、その足で桟橋へ急いだ。

（5）マニラ残留

ア　海路マニラへ

新任の哨戒艇長は、年輩の商船出身予備士官だった。夕刻出港してスルー海を北上する。この艇に電探はないが、逆探があり、私は逆探を使ったことがなかったので早速実習させて貰った。

2 日目の夜、翌朝マニラ入港というとき、「敵機動部隊は明日も来襲の公算大なり、周辺艦船は退避し入港は見合わせよ」との入電があった。やむを得ずミンドロ島と傍の小島の間に仮泊する。その翌日もマニラは空襲、艇では野菜がなくなって缶詰となり、次の日は米の在庫が後一日分となったが、退避命令は解除にならない。艇長は強行することに決心、日没後出港、夜明けにマニラに辿り着いた。私も終夜見張りに立つ。

司令部に行くと、以前と異なりみな殺気立って、ヘルメットもかぶっている。只今空襲警報発令中だというので、建物蔭で待つ。やがて敵機来襲、各所の高角砲機銃が鳴り出すが、いずれも見当違い。向こう側の桟橋の倉庫がやられる。

一段落して司令部に挨拶に行く。丁度指導班一行は報告書を作成して帰国準備中だった。私の所在が判らぬ為、全部隊宛「新庄大尉居所知らせ」と打電したとのことで恐縮する。一行はザンボアンガからレイテ島のオルモック、タクロバンを回り、ルソン島レガスピー経由でマニラに帰投した由、一緒に回れず残念で申し訳なく思った。（当時レイテ島には、山根君、竹谷君が居たはず）。

ＧＫＦでは私一人残ってマニラ周辺の指導を委嘱したいと言われ、私は以上の罪滅ぼしもあって、喜んで残留することになった。

イ　マニラにて（1）

指導班一行を見送り、早速マニラに二カ所ある飛行場の電探整備指導に出かけた。電測校教官への転出(9 月 1 日)臨時ＧＦ司令部附被免(9 月 21 日）の辞令は全く知らずにいた。その前後電測校教官の綿貫少佐がＧＫＦ参謀になって着任され、私は楽になって専ら現地の指導に当たり、また司令部に到着する電探の組立テストを引き受けて、司令部中庭で作業していた。困ったことに到着した兵器に粗悪品が多く、甚だしいのは真空管(特にエーコン管)がソケットに合わず、また試験済み合格の証印かあるのに、電源を入れると燃え出すトランス等、折角送られてきた兵器が組み立て完了すると半数くらいになってしまった。

航空隊でも予備タイヤが車輪に合わないとコボシていた。

ロ　コレヒドール島の一日

ある日（多分 9 月 21 日）コレヒドール島に電探設置下検分のため、工作部技術大尉と同行、朝、桟橋から定期便（タグボートくらいの大きさ）
に乗った。出航後間もなく、遙かキャビテ上空で空戦が始まった。初めは訓練と思っていたが、まもなく空襲と気が付いた。ニコルス飛行場方面に黒煙も見えた。突然左舷目の前の水面に、飛び魚のような水がはねて、直後に頭上を爆音が通過した。艇指揮の兵曹長から、指揮を執るよう依頼されたが、「助言はするが指揮は君だ」と言ってブリッジに上がった。同行の技術大尉は径 1 センチくらいの鉄片を受け、胸で止まったが、本人は気付いていない様子だった。

右舷 500 メートル位を同行していた哨戒艇が、反復銃撃されていたが、やがて蒸気を吹き上げて止まった。一段落して様子を尋ねると、艇長以下数名負傷、故障は修理できるとのことだった。

コレヒードル島に着いたのは正午頃だった。島でも空襲騒ぎで昼食はこれから炊くとのことで、まず島内を案内して貰う。全島焦土となったはずの島には、2,3 年で喬木になったニセアカシアが繁っていた。地上要塞施設は見る影もないが、地下施設は四通八達という。弾痕ものすごい山上の鉄筋三階建て兵舎を見ていると、またもや空襲警報、眼下の狭水道を入港中のタンカーに敵機数機が襲いかかった直後、紅蓮の火柱が立ち上がり、これを追うように黒煙が広がった。最後にゆっくりと立ち上った水柱が崩れ落ちた後には、
海面に大きな波紋が広がり、空には黒煙が漂っているだけだった。

その日の仕事を終わり、下山、既に夕刻だが、昼食どころではなかった。
先の哨戒艇で戦死した艇長ほか数名の遺体と重傷者を、我々の艇でキャビテに運ぶことになり、艇首の甲板に坦架を並べ、緊張の夜航海、午前 1 時頃キャビテ着、死傷者を病院に送り、私は工作部の一室で仮眠させて貰った。

翌早朝車でマニラに送ってもらう。途中物騒だからと、小銃武装した工作部員を助手席に同乗させてくれ、私は拳銃をケースから出して手にしたまま疾走した。臨時の滑走路にも出来る海岸直線道路の傍に、墜落した機体の米軍マークを見るのは嬉しかった。

司令部に到着するとその朝も空襲警報発令中で、朝食はなし。連続 3 食抜きを経験した。睡眠不足もあり、思考力甚だしく減退、通常の行動が出来なくなっていた。

ハ　マニラにて（2）

＊マニラ滞在中また三阪君にあった。彼は例のダバオ事件のときダバオの航空隊にいたそうで、その時のことを話してくれた。

＊マニラ司令部で出撃を待つ若い士官の中には特攻隊員もおり、気軽に話していたが、畏敬の念を禁じ得なかった。

＊マニラでは何度も空襲があり、私は司令部の中庭の防空壕を指定されていた。雨期明けで水が溜まり、支柱はラワン丸太で、弾片除けくらいにしか見えず、一度しか利用しなかった。ある日その壕の横に爆弾が落ちた。私は百メートルばかり離れた建物の蔭にいたが、司令部がやられたかと思った。直後に現場を見に行くと、中庭には径 10 メートルほどの穴があき、もう水が溜まっていた。壕は壊滅、戦死 2 重傷 3 が出たとのことだった。

＊この連日の空襲中豊田長官が視察に来られた。2 泊して台湾に帰られたが、その厳重な警備ぶりには考えさせられた。連日実働兵力が足りないと困っているのに、空中では戦闘機 60 機が警護に当たり、陸上ではまるで行幸のような警備であった。

＊ある朝空襲警報の最中、配置もなく防空壕を信用しない私は、ベッドで寝ていた。そこに先任副官（５８期）が巡回に来られた。朝食後警報中寝ていた士官は出てこいと言われ、他の予備中尉等数名の先頭に並んで、江田島以来の鉄拳を頂戴した。しかしその後も警報で起きたことはなかった。

＊この頃マニラ警備隊の副長に 65 期峰尾静彦大尉が居られた。

＊マニラ司令部で聞いた話、艦載機から脱出した捕虜の話では、帰艦するのに、スイッチを入れると誘導してくれる装置が出来たらしい。

ニ　クラークフィールド

マニラの仕事も一段落した頃、幕僚に同行してクラークフィールドに行くように言われた。クラークフィールド基地は東西 15 キロ、南北 40 キロくらいの所に 10 個の飛行場があり、各飛行場には 2～5 本くらいの滑走路の外、付属設備も整っていて、陸海軍それぞれ機種によって使い分けているようであった。その最北端バンバン飛行場奥の高地に電探装備工事中であった。バンバンの少し南の飛行場に海軍の中攻隊がおり、26 航戦司令部があった。台湾沖航空戦の最中で、在比島全力で敵を攻撃するよう指令されていたが、この司令部に報告される出撃可能機数は毎日十数機に過ぎなかった。

夕刻我々は司令部で灯火管制の下、司令官有馬少将と同じテ･ブルに着いた。司令官はその席でご機嫌よくわざわざ「新庄大尉、電探もとうとう役に立つようになったね、東港の飛行艇が電探で敵を発見触接したよ」と言われ、全く恐縮した。

ホ　有馬司令官出撃

その翌朝、前日の情報に基づいて、在比航空全力を挙げてこれを攻撃することとなった。私は電信室で仕事の整理をしていた。そこへ顔色を変えた航空参謀が入ってこられ、「有馬司令官が一番機に乗って出撃される」と言われた。みなまさかと思いながら指揮所に走った。その日可動の三機の中攻は順次出発しつつあった。その朝司令官は、階級を示すものは全部取らせ、参謀や隊長が引き留めるのも聞かず一番機に乗ってしまわれたとのことであった。

電信室は緊張して電波を待ったが、何時間待っても全く通信はなかった。夕刻近くなっても、当隊だけでなく他基地中攻隊も、一機も帰還しなかった。

陸軍参謀が「まだ連絡はありませんか」と入ってきて、陸軍の偵察機が撮った写真を見せながら、「偵察機の話では、敵母艦は数群あり、各群母艦 2 隻に大小艦艇を配し、上空には邀撃機が数段に構えて、余程幸運でないと近寄れない。敵は捕捉したが、攻撃成果は全く判らなかった」と。写真に小さく見える空母甲板上に逆立ちしたように見える一機がもしやと言うが、みな何の言葉もなかった。10 月 15 日のことであった。

（６）帰国

その日マニラに帰り私の仕事は終わった。

10 月 17 日スルアン島電探見張り所から緊急信「我攻撃を受けつつあり」

ーーー「敵は上陸を企図するものの如し」司令部は半信半疑のところ、やがて平文になり、「我全力を挙げて突撃す」で終わった。見張り所の武装は軽機 2 挺、小銃 5～6 挺くらい、私の教え子も居たはずであった。偵察に出た飛行機は敵情を報告したが、間もなく連絡を絶った。

航空参謀に「丁度内地に回送する機があるから乗って帰れ」と言われ、レイテ島上陸の報を後にしながら、10 月 21 日朝ダグラス輸送機で出発、高雄で給油し、その夕刻には鹿児島に着いた。鹿児島からの汽車は、切符は直ぐ買えたが、乗車は 23 日（当時鹿児島発東京行き急行は一日一本）１０００、熊本までは各停で夕刻になった。山陽路で夜が明け、東海で二度目の日暮れとなり、夜 10 時東京駅に着いた。九州では主要駅でいもの弁当を売っていたが、本州に入ると駅に一切の食糧はなかった。二等車に端然と座っていたが、空腹の 36 時間の旅であった。

この夜小岩の家で一泊、翌 25 日新任地の藤沢郊外電測学校に帰着、着任した。小田急藤沢線「新長後」駅から徒歩 20 分ばかりの所に広大な農地を潰してバラック兵舎を何十棟も建て、本部だけは木造二階建てであった。の日は比島沖海戦があったが、我々は何も知らなかった。

９.電測学校教官

（１）各地出張

マリアナから B29 が偵察爆撃にくるようになって、内地の電探見張所が一段と重要になってきた。各鎮守府、警備府から電探配備について電測学校に照会があり、私は南方の経験を買われて、担当のようになってしまった。12 月には、呉鎮、佐鎮、阪警に順次出張を命じられた。いずれも現地に指導に行ったことはなく、司令部だけで帰ったと思う。

阪警からの帰途、「東京行きは名古屋泊まりになるかも知れぬ」（１２月 7 日東南海地震）との大阪での警告通りとなり、やむなく中央線に乗り換えたが、最初から満員で中に入れず、デッキに立ったままで、沢山のトンネルでの煤煙がひどく閉口した。

夜半、塩尻で乗り換えたが今度はデッキにも乗れず、小荷物車に乗った。もちろん椅子も何もなく、暗い電灯が一つだけで、雪となった甲斐路は寒冷甚だしく、途中の駅で小用を済ませる始末だった。翌朝煤だらけで新宿に着いた。

（２）兼横鎮出仕

12 月 18 日付で兼横鎮出仕となり、防空関係の仕事について幕僚を補佐することになった。横鎮では、裏山の立派な横穴式防空壕の中に防空指揮所が作られ、大きな表示板があって、各見張所の情報が表示されるようになっていた。見張所や防空砲台、航空隊を初め必要箇所と直通電話があるほか、無線通信施設も備えているようだった。

当初は幕僚室で食事を共にしていたが、窮屈きわまりなく、しばらくして横警に頼み、防空壕勤務の連中と寝食を共にすることになった。

南方から来襲する敵機は、小笠原や伊豆諸島から発見電が入るが、目的地が関東か、中部か、関西か最初は判明しない。関東ならば陸軍東部軍に連絡しながら警報を出さねばならず、発見電から退散して警報解除まで数時間指揮所に張り付くようになった。

次第に空襲の頻度を増して毎晩のようになり、睡眠は昼間という不健康な状態になってしまった。この勤務は非常勤で翌春まで続くが、屡々電測校に戻っていた。

防空指揮所には邀撃戦闘機関係者も詰めており、厚木空の小薗司令もよくお見受けした。その頃東部軍司令部(市ヶ谷)の見学に行ったこともあった。横鎮より規模が大きく当直員も何倍も勤務していた。

（３）電探基地下見

20 年 1 月研究中の電探による戦闘機誘導装置、連動高角砲基地、対空見張所等の適地を求めて静岡県方面に出張した。技研の高柳博士、同 62 期の松井宗明少佐も来られて、数名で石廊崎、十国峠、牧ノ原等を廻った。いずれも実現に至らなかったと思う。対空見張用としては、冨士山頂が最適とは、当時の夢物語であったが、戦後気象レーダーが設置されたときは、今昔の感に堪えなかった。

（４）電測校にて

電測校校長は、初め 42 期牛尾藤雄少将、後に 44 期高橋雄次少将、教頭は、初め 49 期馬場金治大佐、後に 50 期宇垣環大佐だった。副官は 62 期野口新逸少佐。教官室には先に書いたメンバーに加えて、64 期阿部睿少佐、渡邊久少佐が来られ、以前から艦船用電探に熱心だった 68 期森健二郎大尉も加わった。

私は初めバラック兵舎入口の分隊長室に起居していたが、後に本部裏の士官宿舎個室（二人部屋）に移った。ある朝本部玄関で金子正君が中尉の襟章で立っているのを見付け、声を掛けて、一晩同室に泊まっていった。彼は滋賀空の教官で、電探の勉強に来たのだった。その後住山徳雄君が予備学生隊の教官で着任し、久里浜以来また同室になった。彼は療養中いろいろ勉強したらしく、大森貝塚の話をしてくれた。箱根でご療養中の秩父宮両殿下に野鳥のご説明もしたとのことだった。

学生、練習生は、ますます増加し、総員 2 萬名に及ぶ大所帯となった。その食糧や燃料の確保は大変だったらしいが、若い長野主計長(東大出、戦後広島県知事) の敏腕で間に合っていた。

バラック兵舎は寒気厳しく、厳寒期に若年兵が相次いで急死する事態が発生した。原因は栄養失調と寒気だということで、部内で非難された。主計長は全国から大量の薪を調達し、就寝前に別に入浴させたり、夜食の雑炊を算段したり大変な努力をされた。

（５）東京大空襲

この冬 B29 の本土空襲は激しさを増し、防空砲火も戦闘機もあまり戦果はなかった。3 月 9 日夜いつもの如く空襲警報があり、灯火管制下の士官室に数名で待機していたが、爆音はいつもより多く聞こえていた。ややあって外に出てみると、東の空が真っ赤に染まって明るく望まれた。ラジオではよく分からないながら、大分大きい空襲だと思われた。

翌日は休日だったので、自宅の様子を見るべく東京に向かった。それまでも東京の下町は度々の空襲で次々と廃墟となっていたが、省電は環状線までは何とか普通に動いていた。

小岩に行くべく総武線に乗ると、ひどい焼け跡が続き列車は錦糸町で打ち切りとなった。レール上には焼け爛れた電車が放置されていた。その辺から東方は見渡す限りの焼け野原で、鎮守の森らしきものだけ焼け残っていた。至る所に黒こげの死骸が見られ、小川には白い人肌が幾つも浮かんで見えた。たまに歩いている人は顔も煤だらけで、みな一様に赤い目をしていた。電車の客はゾロゾロと線路上を歩いた。やがて荒川放水路の長い鉄橋にかかったが、西風に押されながら何とか渡った。新小岩まで行くと焼け跡は少なくなって、焼け残りの家が次第に多くなった。

国道には、どこから来たのか避難者が、三々五々僅かな荷物を持って、東へ東へと歩いていた。所々で付近住民らしい人たちが、これらの避難民に雑炊のようなものを、炊き出し奉仕しているのを見受けた。

我が家は茅葺きにもかかわらず、燃えずに残っていた。随分大きい火の粉も飛んできたそうだが、よく残ったものだった。父母の無事を確かめて、折り返し帰途に付いた。

隅田川のあたりでは、陸軍が、黒焦げのマネキン人形のような遺体を、トラックに山のように積んでいるのを見た。多数の非戦闘員を、無差別に殺傷した実状を目のあたりにし、悲憤を禁じ得なかった。

（６）敵電探説明書

Ｂ２９の僅かな撃墜機から押収した電探の説明書が送られてきた。上質紙の取扱説明書は、日本のもののように結線図などは全く記載されず、戦後日本で見る電化製品の説明書のように、取り扱い方法、手続きだけが、素人にも判るように簡単に記入されているだけだった。

１０．肺結核

（１）発病

３月下旬のある朝、血痰が出て安静を命じられ、次いで発熱、４月３日戸塚病院に入院、２４日専門の野比病院に転院した。何度も特攻が報じられる戦局の下、誠に不本意ながら、早く治すしかないと自分に言い聞かせた。

その頃から病状は安定し、何度かレントゲン検査もあったが、顕著な病巣も認められず、喀痰検査も最初の一度の外は陰性が続いていたので、希望して 5 月 15 日退院となった。

（２）退院即日再入院

その日みなに見送られて定期便のトラック荷台に乗り、横須賀市内に向かった。駅のベンチで急に胸苦しくなり、僅かながら喀血した。同行してきた非番の看護婦二名が病院に連絡し、久里浜駅まで電車、後は病院の車で、再入院した。

軍医が驚いて、「訳が分からぬ、とにかく絶対安静」（絶対安静では、身体も動かせず、口も利けない）とのことで、付添婦をおいてくれ、枕元にメモをおいて、用事は全部筆談、洗面、食事から排泄まで一切世話になる。常時天井と睨めっこ。外の景色も手鏡で窓越しに見るほかはない。一週間ほどで、少し良くなったと思い動いてみるとまた喀血。回を重ねる毎に出血量も多くなるようで、今度は本当に大人しくなった。

（３）長野県へ転院

20 年 6 月、B29 に加え艦載機の来襲も多くなり、病院でも空襲のつど避難を命じられ、重傷者は担架だったが、私は例によってサボっていた。その後特に症状もなく、少しずつ動ける

ようになり、2 人部屋になって、70 期渡邊博君と同室だったこともあった。

7 月に入って、遂に遠雷の如き艦砲射撃の音まで聞こえるようになり、病院は特攻基地に使われることになって、入院患者の軽症者は退院、大部分は他に転院することになった。

我々士官病棟の 20 名ばかりは、長野県小布施の民間療養所「新生園」に移ることになり、軍医 1 看護婦 2 名が付いて横須賀線経由、東京からは特別に借り切った 2 等車半分に乗り、中央線で長野に着いた。横浜のひどい焼け跡と、甲府の焼け野原が印象に強く残っている。途中空襲で何度も停車し、予定より遅れ、長野着が夜となり、その日は車中泊で、翌朝長野電鉄に乗って小布施に着いた。

新生園はキリスト教会の経営で、赤煉瓦のチャペルに付属して建っていた。暑さは厳しかったが、周辺は平穏で、職員はみな親切にしてくれた。教会では毎朝礼拝があり、一般患者も多く参加していた。

11. 終戦

（1）自主退院

8 月に入ると、広島、長崎の新型爆弾の被害が報じられ、非条理と思われるソ連の参戦もあり、これは大変なことになったと悶々たる毎日となった。8 月 15 日予告により歩ける者は一室に集合、玉音放送のラジオを拝聴した。雑音も多く内容は全く判らなかったが、そのうちに 2,3 の人がどうもおかしいと言いだし、続く解説放送に耳を傾け、ポツダム宣言を受諾して降伏したことを知り、全くショックだった。

民間病院では、海軍がどうなるのか、我々はどうすべきか尋ねる術もなかった。野比から転院の最先任 57 期の林一夫少佐はここに留まると言われたが、私は歩けるので、ここの管理元の病院が湯田中にあると聞いて翌日尋ねた。大きな旅館の玄関に、「海軍病院」の看板が掛けてあった。まだ何の指令もないということであったが、私は「自分の仕事はこれで終わった」と結論し、多分電測校に帰れば身の処し方も判るだろうと思い、事務所に退院を申し出ると、むしろ喜んで許可してくれた。その翌日信越線で上野経由、小岩の家に一泊し、家にあった短刀を鞄に入れ電測校に帰った。

（2）電測校での終戦処理

電測校の研究部では、みな放心状態で、何をして良いか判らぬ状態だった。61 期の今村少佐が、広島出張中被爆戦死されたことは、痛恨の極みであった。

近くの厚木空終戦反対派が檄文を撒き、異様な空気であったが、やがて小薗司令が入院されて事なきを得た。マッカーサーがその厚木に来ると決まり、電測校では、8 月 25 日までに全員（約二万）を復員させて立ち退け、ということになり、急に騒がしくなった。各倉庫の衣料や食糧を復員兵に分配し、中には役得組もあったと聞いた。そのうちに構外からの侵入者による略奪も始まり、私も気が付いたら、玄関においた長靴と皮脚絆を取られていた。

（3）鈴川実習所より復員

残務整理に関係のない我々は、野崎科長を筆頭に、とりあえず横通校の鈴川実習所（静岡県）に移ることになり、米艦載機が低空を飛び回る中を、藤沢から列車で鈴川に向かった。鈴川では手伝いのため兵員も必要になるので、近隣出身の復員兵 20 名ばかりを選んで、参加させ、私が分隊長役を命じられた。鈴川では、民家の厚意で駅近くに分宿させて貰った。その謝礼に

は食糧や毛布等を充てていたようであった。私は住山君と同宿、随分厚遇を受けた。数日この下宿から田子の浦近くの実習所に通ったが、何もやることはなかった。ここに来た士官達は無感動の様子で、敗戦をどう受け取っているのか判らなかった。私は場合によってはと、短刀を忍ばせていたので、拍子抜けがした。

やがて数日で我々も解散することになり、先ず兵員に私は「復員しても、自由放縦に流れることなく、海軍の教育を受けた青年として、誇りを持って他の人たちの模範になって貰いたい」と、最後の訓示をして復員させた。

いよいよ我々も解散、住山君と二人で帰京、兄の遺品の軍刀を進駐軍に没収されては困ると、下宿に預けてきたが、軍刀を下げた住山君も無事で、品川で別れた。履歴書によれば、9 月 10 日予備役編入となっている。

私は 1 ヶ月余の後に自宅で喀血した。苦難の闘病生活はむしろこのときから始まったのだった。

――――――